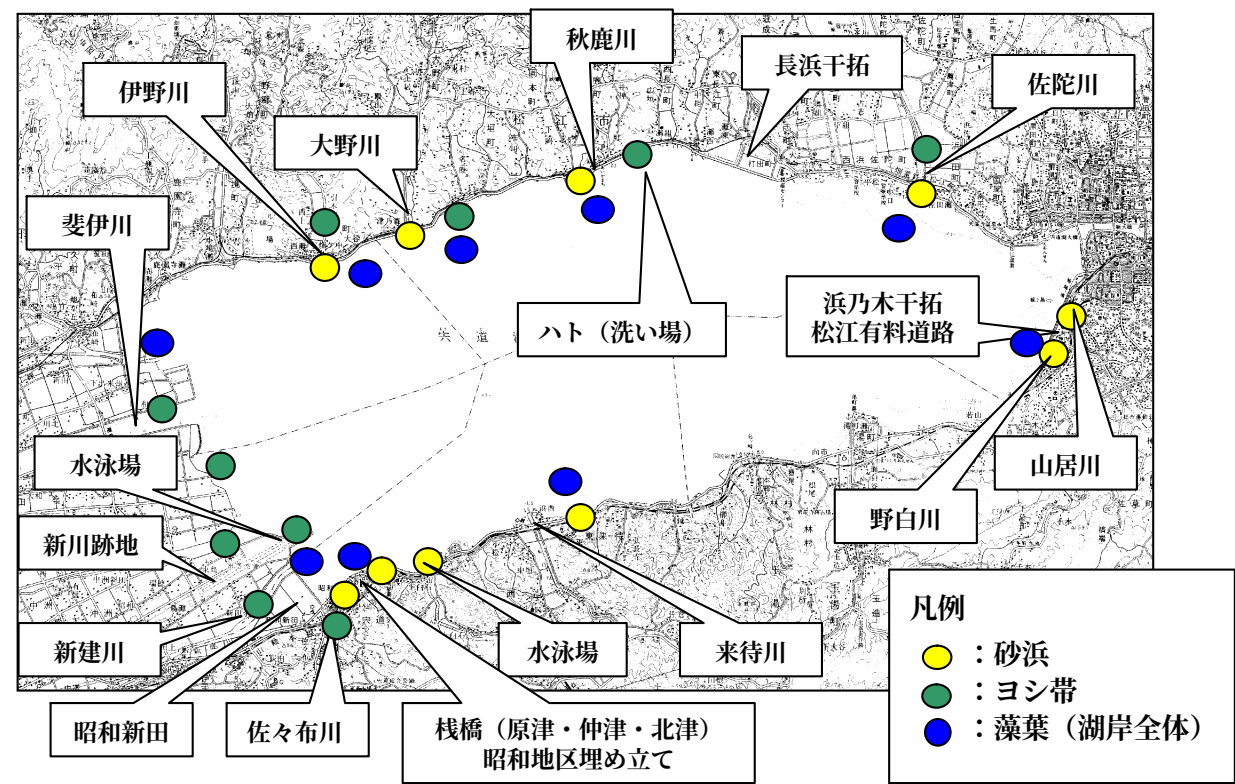


ヒアリングまとめ（昭和 10 年代後半～30 年代前半）

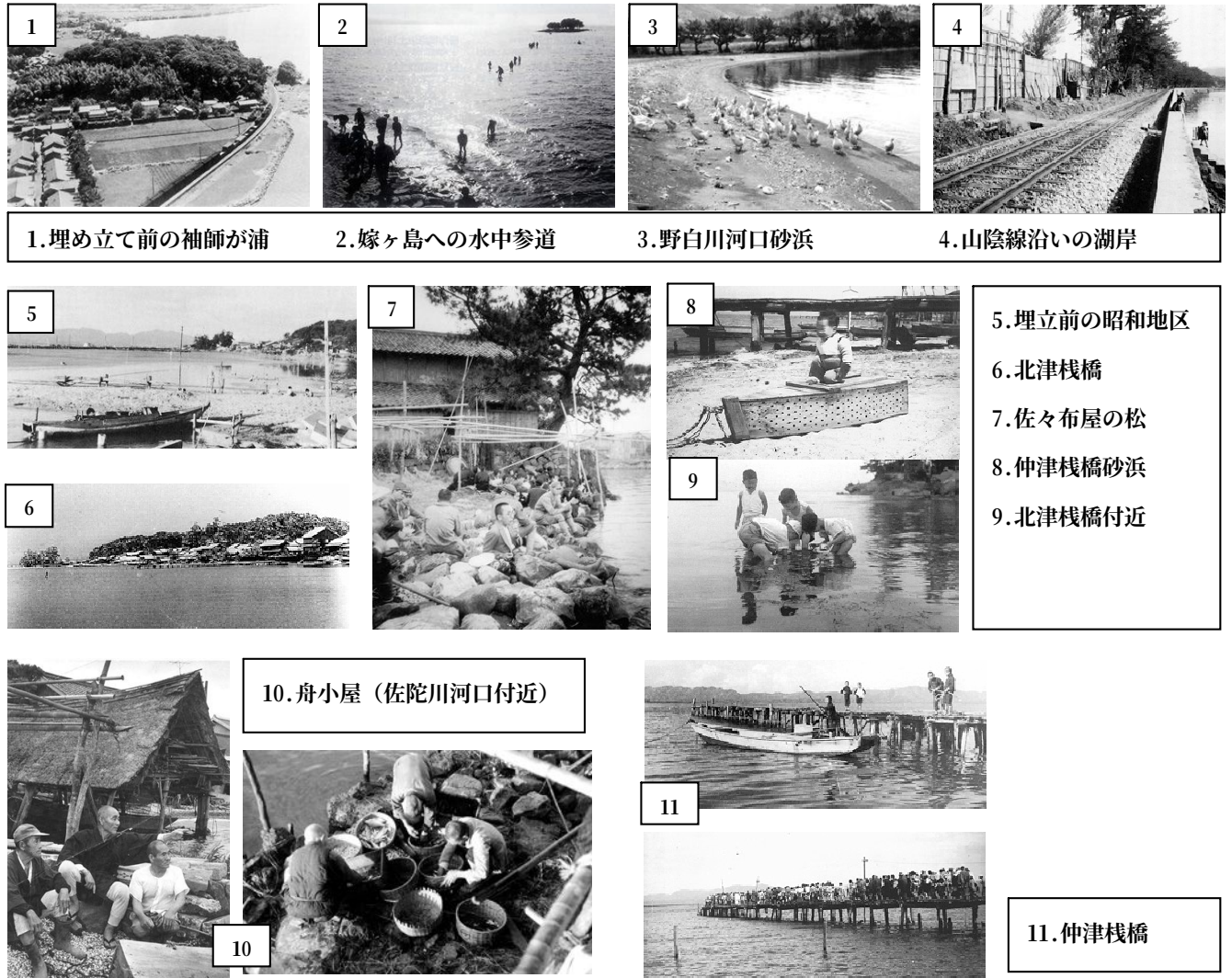
1 湖岸の環境



- (1) 湖岸全体に藻葉（沈水植物）が繁茂していた
- ・ 少し沖合から数十～数百mの範囲／湖底が砂地のところはみんな生えていた
 - ・ 船を出すときにスクリューに絡まるので、藻を刈って舟道を確認しなければならなかった
 - ・ 藻は細くすらっとしていた／モンバと言っていた／藻は田畑の肥料にした
 - ・ 藻葉には魚がピチピチはねていた／魚の産卵場にもなっていた／藻葉に穴をあけて魚釣りをした
 - ・ 藻があることで波がうち消された／藻葉とシジミの生息場所は一致する
 - ・ 昭和 30 年後半～40 年代？に入って急になくなった／塩分や農薬の影響？
- (2) ヨシなどの抽水植物は流入河川および湖岸では限られた場所に生育していた
- ・ 河川：新建川／五右衛門川／斐伊川河口／伊野川／野白川／佐陀川／佐々布川
 - ・ 湖岸：高ノ宮駅付近湖岸／秋鹿町駅東側湖岸
- (3) 湖岸は砂浜だった
- ・ 松江市浜乃木町（干拓前）：山居川と野白川の河口部に砂浜が形成された。
 - ・ 宍道町東来待：湖岸は砂浜だった（道路から 20m くらいまで）。ヨシは生えていない。泳いだ。
 - ・ 宍道町（昭和地区埋立前）：佐々布川河口東側に砂浜が形成された。泳いだ。
 - ・ 斐川町（飛行場の突端あたり）：湖底は砂地（泥混じり）だった。夏休みは子供の水泳場になった。
 - ・ 平田市美野町（伊野川河口）：河口の州は畑になっていた。湖岸はハンドが並べられていた。
 - ・ 松江市大野町（大野川河口）：河口の州は畑になっていた。
 - ・ 松江市秋鹿町：湖岸にハト（洗い場）が設けられていた。
 - ・ 松江市西浜佐陀町（佐陀川河口）：湖岸は浜になっていて水際に半分舟小屋をかけていた。

■湖岸の様子（まとめ）

ヨシ等の抽水植物は、湖岸では少なく限られた場所に生育していた（斐伊川など流入河川に群落形成）。湖岸は砂浜、あるいは砂地で、湖岸一体に沈水植物が広く繁茂していた。



「中海干拓・淡水化事業に伴う魚属生態調査報告」（宮地伝三郎、1962.3）

- ・ ヨシ帯の発達は微弱で、湖岸一円に小群落が所々断片的に存在するにすぎない。群落は巾も奥行きも狭い。北岸では佐陀川から秋鹿、高宮、大野等、南岸では島ヶ崎から来待に至る間、西岸では斐伊川河口付近一帯
- ・ マコモはほとんど帯をなさない。北岸：佐陀川に並行した小沼に通ずる水路、南岸：島ヶ崎、来待
- ・ ヒメガマは南岸来待にのみわずかに生育
- ・ 宍道湖における水草は、・微々たるもので、僅かにササバモの群落がやや目に付く程度にすぎない。（ホザキノフサモ／エビモ／ヒロハノエビモ／ササバモ／セキシウモ／コアマモ／シャジクモ／オオイシソウ／ホソアヤギヌ／タマリシオグサ）

島根大学汽水域研究センター・国井秀伸先生のコメント（上記報告書と最近の調査からの推測）

- ・ 宍道・斐川沖にはシャジクモが大きな群落を形成し、これにホザキノフサモとエビモが混じっていた。
- ・ セキシウモは、各流入河川の砂質の浅場に局在していたと思われる。
- ・ 斐伊川河口のヨシ帯には汽水生のイトクズモが生えていた可能性大（今でも佐陀川河口に見られる）。
- ・ エビモ、ホザキノフサモと一緒にリュウノヒゲモやカワツルモ、トリゲモも生えていたのではないかとと思われるが確証する資料がない（トリゲモは今でも斐川の流入河川に細々と生育している）。
- ・ 浮葉植物は、ササバモでまず間違いない。